

激 流

第二部

高 見 順

激

流

第二部

激流 第二部

昭和四十二年八月十七日 第一刷発行 ©
昭和四十二年九月十日 第二刷発行

定価百五十円

著者 高見順 たかみ じゅん

発行者 岩波雄二郎

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行所 綴岩波書店

理想社印刷・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

その一

初めての下屯子である。

進一は青い満人服を着ていた。裾が長く、その裾の切れめが足にまつわって歩きにくい。同行の古賀も同じ粗末な満人服である。古賀は進一とちがって、足さばきがうまく、悠揚とした足どりは進一より年上のように見せていた。ほんとは年下なのだが、満洲生活は古賀のほうが古いのだ。

進一は満洲に来てまだ半年である。またたく間に半年が過ぎていた。

来た当座は、しばらくハルビンにいて、それから北の綏化に移った。その農事合作社で進一は満洲農業に関する基本的な勉強をした。日本の農業についてさえも知らない進一は、イロハから始めなくてはならないのだった。

もう一度、学生に戻ったような勉強を、自分に強いた。進一にとってそれはそう苦痛ではなかった。知識のための知識を仕込む観念的な勉強ではなく、これからの仕事のための具体的な勉強である。進一の望んでいた生活に即^つくための、それは必要な前提条件であり、進一が欲していた新しい生活にはいるためには、どうしてもなくてはならない準備である。進一にとってそれはむしろ心楽しいことだった。

合作社のグループはそれを学習と名づけていた。いい年をしてバカバカしいと嫌悪する者もないでは

なかった。事務系統の仕事をする分には、そうした学習はかならずしも必要ではなかった。

進一が満洲に來たのは、就職が目的ではなかった。左翼運動のときもそうだったが、上部機関の指導者になりたいという気持はない。じかに満洲農民のなかにはいつて、合作社運動をしたいと思つた進一は農業関係の本をあたかも受験勉強のようにむさぼり読んだ。

一方、進一は若い古賀から實際の話をいろいろと聞いた。年は若くても、そのほうではいわば先輩の古賀に、満洲農業の實際について教えて貰つた。本の知識よりむしろ、古賀の話のほうが進一にとって得る所が多かつた。

たとえば満洲の農民は大豆だいずをどういうふうにして作るか、古賀からその實地の話を進一は聞いた。その話によつて進一は、單に大豆の作り方だけでなく、満洲の農業の實態を知ることができた。言いかえると、たつたそのひとつの話からでも、進一は満洲の農業経営の實際を古賀から具體的に教えられたのである。

満洲の大豆には、白眉バイメイ、黑臍ヘイヂ、黄宝珠ホワンパオチュ、四粒黄スリーホワン等の品種がある。白眉はヘソが白色のもので豆腐、味噌、醬油の原料にこれが一番使われる。黑臍はヘソが黒色のもの。四粒黄は種皮が黄色で、大粒の大豆。ヘソはエビ茶色。満洲で一般に栽培されている品種はこれである。黄宝珠は公主嶺農事試験場で四粒黄を改良して育成した品種、実が大きく、光沢もあつて優秀な大豆だが、北滿では収量が劣る。こうしたことは本に書いてある。

この大豆の作り方だが、本にはこう出ている。まず整地——これは播種と同時にするので、特に整地は行わない。大豆の前作は普通、粟や小麦で、その前年の溝ロンゴイ（壟溝）の部分が今年の畦ロンタイ（壟台）となるようにす

るため、前作の根株を播種と同時に鋤きこんでゆく。この畦立は滿洲農具の犁杖^{リジャン}で行う。リージャンで播種することを翻地^{フンデ}と言う。

この播種は、内地とちがって土壤の乾燥を防止する、いわゆるドライファームिंग的播種法である。内地のように深耕を行って、半月ほどそれを放っておいて反転した土が乾燥した頃、馬鋤で細碎して、一両日経て畦をつくり、またしばらく経て種子をまくといったような耕耘から覆土まで長い日数を要する播種法とは非常に相違がある。

このドライファームिंगについて農業書の叙述はこうなっている。大豆をリージャンで播種する場合は、四頭掛の馬がひとつの畦の中央を切って、新しい蒔溝を作り、そこへ種子の蒔き手が播種すると、次の畦を切って行くリージャンが前の播溝に覆土すると同時に新しい播溝を作って行く。こうして播種する一方、木頭^{キト}轆子^{リコ}を一頭の馬にひかせて鎮圧して行く。土壤水分の蒸発を防止するため、こうして整地、播種、覆土、鎮圧を連鎖的に行うのがドライファームिंग的農法である。

同じ作業を古賀は次のように進一に語った。リージャンで前年の畦をまんなかから鋤き割って新しい土を前年の溝部に出す。そのあとからツァイゴーツデ(跣溝子的)が、前年の溝に鋤き出された新土を踏んで行く。

「土が乾かないうちに、早いところやなくちゃならないんで、一人がそれにかかりつきりで溝を踏んで行く。これをツァイゴーツデと言うんです」

つづいてシャーチュンヅルデ(下種子児的)がこれも新土を踏みならしながら種子を蒔いて行く。

それぞれ仕事を分担している。種子に土をかけるのもフリージャンデ（扶犁杖的）という別人である。

それぞれ一人でもいいのだが、乾燥のひどい年は（あるいは新開地の場合は）溝を踏むツァイゴーツデの人手が二人になる。

「次の畦を切るときに自然と覆土ができることはできるが、それではやはりうまくないですね」

と古賀は言った。すべては土壌の水分の蒸発を防ぐためである。

播種量は一シャン（日本のほぼ七反二畝）当り、日本枡で言うところと六升内外、こうした播種に要する人員は、

ツァイゴーツデ一人（又は二人）

シャーチュンヅルデ一人

フリージャンデ一人

カヌマーデー（趕馬的。馬の口を取る者）一人

四人は最低必要なのだ。そしてこの一組だけでは一日約一シャンしか播種できない。

「そこでどうしても雇農を使わなくちゃならないんです」

古賀は言った。

「中耕から除草、それから収穫となると、もっともつと労力がいらしますしね」

大豆畑は次の年、普通は高粱を作る。この播種は、壊耜（ホウイ）という農具を使って行うので壊種と呼ばれている。大豆は翻種（フアシン）である。

小麦はリージャンを二つ並べた対兎犁（トイリ）を使って播種する。これを蹠蹠（クシツツ）と言う。輪作によって規定される

この三つの耕種法——翻種、壤種、蹠踵はいずれも土の水分の蒸発を防ぐため、播種、覆土、鎮圧が一貫作業なので、どれも人力が要る。

自家の労働力以外にどうしても人力が必要なのだが、満洲は安い労働力にはことを欠かない。苦力と呼んでいる農業労働者がこれである。貧しい小作農でも農業労働者を雇う。この雇農には金でなくて、できた作物で払えばいい。

満洲の農業は雇農によって成立している。古賀から大豆の作り方を聞いた進一は、同時に満洲における農業経営の実態を教えられたのである。

「日本の開拓移民も満洲ではどうしても雇農を使わなくちゃならないんで、そこにいろいろ問題があるんです」

と古賀は言った。

——この古賀のほかに、通訳として満人が一緒だった。王という青年である。三人はトラックに乗って下屯子に赴いた。

緑の曠野をトラックが疾駆している。冬は零下何十度のこの北満も、今はジリジリと照りつける陽が暑い。除草にはまだすこし間があるという時で、畑に人は出ていない。

濛々と土埃を立てて、でこぼこ道をしゃにむにトラックで走る。ひどい振動だ。遠い地平線がぼうとかすんで見えるのは、かげろうが立っているというだけでなく、脳震蕩気味なのだとも思われる。

「やっぱり運転台に乗ればよかった」

進一は口のなかで言った。その口のなかは砂でじやりじやりしていた。

トラックの運転台は、詰めれば助手台に二人は乗れる。王青年をうしろに乗せれば、進一と古賀は楽に助手台に腰かけられたのだ。

出発のとき、満人の運転手は当然そうするものと思って、助手席のドアをあけて進一を待っていた。しかし進一は、

「みんなで話をしながら行こう」

と言った。満人の王ひとりを荷物のようにトラックのうしろに乗せて、日本人の自分らだけ楽な助手席に乗ることを進一は、差別をつけるようで好ましくないとした。だがそれを進一は口に出して古賀に言うことはしなかった。

古賀は黙って、うしろに乗った。進一を甘いなと見ているようでもなかったが、その思いやりを当然として顔でもなかった。

古賀はもともと口数のすくない男ではあった。蒼い、くすんだような顔をしていて、ひと筋に何か思い詰めているまじめさが、人に窮屈な感じを与える。そのくせ、ひょうきんなところもあって、何かの拍子にそれを見せる。でも、それが周囲と調和しないときが多かった。古賀は農業学校の出身だった。

進一が非合法運動をしていた頃、こういうタイプの若者に会ったことがある。しかし古賀は左翼ではなかった。むしろ右翼と言ったほうがいいようだった。その点、進一は自分たちと世代のちがう青年を古賀

のうちに見ていた。にもかかわらず進一は古賀が好きだった。古賀のほうもそうにちがいないと進一は思っていた。

この古賀を真中にして、進一たちは運転台を背に、毛布を布いた上に腰をおろした。ここが一番振動のすくない場所である。そこを選んだのはそのためだったが、いざとなると、すくないどころの騒ぎではなかった。

でこぼこ道にかけると、トラックはまるで人を振り落そうと暴れる悍馬のようだった。横の振動でなく、上下動だ。

身体がひょいと、たあいなく浮いた。と思うと、ドスンと落される。進一はトラックの枠にしがみついて、痛い尻もちを防いだ。

真中にいる古賀は、つかまるものがない。たまりかねて、立ち上った。進行方向に身体向きを変えて、運転台の屋根につかまった。

「こいつは全く、ケツがたまんねえな」

進一はわざとそんな言葉使いをした。そして自分も立ち上った。

「でも……まだ」

と古賀は吹きつける風に言葉をとぎらせながら、

「冬の櫓よりは、ましたな」

農閑期の真冬に、古賀は合作社組織の下準備のため屯子(部落)を廻って、戸別調査をしていた。その苦

勞のほどを進一にひけらかすといった語調ではなく、

「永森さんも今年の冬は、あれに乗らなくちゃならないが、冬の下屯子はいやだな。なあ、王君」

「どですか——ね」

これは王の口癖で、笑いながらそう言うと、王も立ち上った。とぼけた王の口調に古賀も笑いを誘われながら、

「冬のほうが、いいかい」

「冬は匪賊の心配ない……」

と王は、冗談のつづきのような口調で言った。

「今はあぶない？ 危険？」

進一も笑いながら言ったが、ほんとには笑いごとではない。

「秋まで大丈夫だろう？」

「どですか——ね」

と言う王のあとから古賀が、

「冬だって、場所によってはやられてる」

古賀は合作社運動にはいる前、開拓移民のほうの仕事をしている。

屯子の^{ウエリス}（土堀）が見えてきた。外国映画に出てくるサハラ砂漠あたりの外人部隊の要塞を思わせる。

匪賊の来襲にそなえて、屯子の周囲に土塀をめぐらし、四方に銃眼のついた望楼が築いてある。

すでに暮色が迫っていた。門に近づくと、早くもなかの犬が吠え出した。敵意にみちた声である。屯子の人々の気持を代表して吠えているかのようだ。

のっそりと現われた満人に、王がトラックの上から大声で開門をもとめた。

門は直ちに開かれたが、

「ふーん」

進一の口からなんとなく、そんな溜息が洩れた。

門をはいると、土を固めて作った小さな家が並んでいる。道と同じ色をしているので、その房子フナシから、何事かと出てきた人々の姿が進一には、土からもぞもぞと顔をのぞかせる虫を思わせた。蔑視からではない、それが実感なのは、進一の心を惨めにさせた。虫みたいな人間を惨めに思うというより、そうした人間を眼にせねばならぬことが何か惨めなのだった。

彼等がすなわち農業労働者である。彼等はしかし独立家屋を与えられているのだから、雇農としてはこれでも上の部なのである。

進一たちが訪れたのは、そうした一雇農ではなかった。四十シヤンを自作し、ほかに十シヤンほどの小作をしているという農民の家だった。

この農民のことは古賀から前もって聞いていたが、自己児地ツゴルデ(自作)兼租地ツイデ(小作)という、日本には無い例である。屯子で人望があり、そして協力的なのだと古賀は言った。

「ああいう人物を屯合作社の責任者にすれば、みんな、ついてくると思うんです」

と古賀は言っていた。

かつての左翼のオルグを思わせる言い方だ。オルグ活動と同じ方法が合作社の組織に用いられているのだ。それが左翼とは無縁の古賀に、おのずと左翼的な言辞を使わせている。

「ほう……」

と言った進一は、同時にひやりとしていた。

その家は、屯の構造を小型にしたみたいにな、まわりに土塀があり、門もちゃんと設けてあった。門の内側から犬が吠え立てた。

「看狗！ 看狗！」

と古賀が大声で言った。進一も一緒に連呼した。

農民組織のための下屯子は進一にとってこれが最初だったが、こうして部落に来るのは何もこれが初めてではなかったから、こういう言葉は進一も心得ていた。

部落見学はすでに何度かやっていた。そのつど、獰猛な満洲犬に進一はおどかされた。クサリでつないでない犬だから、今にも噛みつかれそうな目に会ったこともある。事実、足を噛まれて破傷風はしょうふうになった日本人もいた。

満人の百姓家を訪ねたら、まずもって、

「看狗！」

と叫んで、飼い主に犬をおさえて貰わねばならぬ。「今日は！」にかわる、これが、来訪を告げる挨拶のようなものだ。奥から若い男が出てきて、吠える犬を鎮めると、古賀に親しそうに笑いを向けた。

「ここの次男坊の郭さん」

と古賀が進一に紹介した。

門から家までの間が、馬のつなぎ場になっていた。使役のために馬小屋から出してきて、その前庭に一時つないであるといった形だった。日本人の進一にはそう見え、そう思われる。だが、満人の農家ではこうした露天で馬を飼っているのだ。小屋がけの置場は作らない。

「北海道の道産子^{ドサンコ}(馬)と同じですよ」

と古賀は言った。冬でもこのままだと言う。

北海道生れの古賀から進一は前に、道産子の雪中放牧の話聞いた。道産子を進一は知らないが、満洲馬は小さな体軀ながら、いかにも頑健そうな馬である。

十頭ほどの馬が舟形の林入れに首をつっこんで飼料をさかんに食べている。この満洲馬のことを、開拓移民の日本人がいつだったか、

「全くいじきたない」

と憎々しげに言ったのを、進一は思い出させられた。日本の馬とくらべると、まるで働きがなくて、食い意地ばかり張っていると、まるで人間を罵るみたいに言った。

「そのくせ腹いっぱい食わせないと、働きが鈍るんだから、始末が悪い」

そうも言った。

馬に対して愛情が持てないというだけでなく、そこに満洲そのものに対する感情の現われがあるようで、進一はさむざむとしたおもいだったが、飼料の費用を考えると、農民がなげくのも無理はない。

「夜中でもゴソゴソやって、食ってるのを聞くと、身が細るおもいがする」

そうも言った。人間の食料を馬に食いつぶされて行く気がするといった実感が、その言葉にはこもっていた。

いわゆる濃厚飼料に使われる高粱や粟は、満洲では人間の食料でもある。だからクズ大豆などが主としてその濃厚飼料に使われているとはいえ、なれない土地での農業で、苦しい生活を強いられている日本の移民にとって、馬の「いじきたなさ」はさぞかし、たまらないだろうと進一にも想像はつく。「夜中のゴソゴソ」は、とぼしい食料をみすみす馬に食われて行く音として、身にしみるにちがいない。ワラやイモの根などの粗飼料だって、ただではない。

古賀はこの開拓移民の農業指導のために満洲へ来た。前の年の八月に満洲農業移民が「日本帝国の国策」として決定された。移民関係の協会の農事指導員として古賀が渡満したのはその直後だった。

この古賀は、北滿移民の農業は北海道のような酪農経営にすべきだという意見を持っていた。

その意見は用いられなかった。それは穀作農業の軽視になるという理由から否定された。言いかえると、穀物増産を重視する「国策」的見地から古賀の意見は排撃を食った。

農業移民のほうもまた、内地のような穀作に執着を持っていた。抜きがたい執着を、そのまま内地から

持ちこんでいた。

移民農業には、土地の問題、雇農の問題、その他さまざまな問題がわだかまっていた。古賀は農事指導員をやめて、合作社運動に身を投じたのである。

だが、この農事合作社の仕事にも、いろいろの問題があった。矛盾と言ってもいい。そう言ったほうがいい、さまざまな問題が、今やっと発足したばかりの運動の内部に、すでに孕まれていた。

（本稿は旧友塙英夫の「アルカリ地帯」、島木健作の「満洲紀行」等に負う所が多い。）

この家のあるじは一見老人のようだった。眼のふちが赤くただれていて、いかにもじじむさいが、不精ひげを生やしたその顔は、よく見ると案外まだ四十台とも思われる。日本でも僻地によく見かける農民タイプで、表面は卑屈なくらいおとなしいが、心は外来者に対して許さない。そういった感じのあるじだった。古賀は協力的だと言っていたが、ただれた眼の奥から警戒と猜疑の光を放っているかのようだ。

砂ぼこりを払って家にはいると、そこは暗い堂屋地（土間）だった。あるじを進一に紹介した古賀が、「郭さんの、こちらが兄さん……」

とつけ加えた。門まで迎えに出てくれた若い郭を古賀が「次男坊」だと言ったとき、進一はそれを息子の意味に取ったが、あるじの弟ということなのだった。兄弟でこの家に住んでいるのだ。

古賀はトランクのなかから、早速何か出してきて、

「約束の品物……」

と言って、眼薬をあるじに渡した。

「^{ロートメシヤオ}老篤眼薬」

あるじがそれを押しいただくようにして、

「^{シユシユ}謝々」

と喜ぶその声は若かった。

部屋の奥に^{オウグワンニヤニヤン}眼光娘々の絵姿が貼ってある。眼の神が祭ってあるのだ。あるじはそれに眼薬をそなえた。「^{ダシユンニヤオ}大学眼薬より、どういふわけかこのロート眼薬のほうが評判がいいんですよ」

と古賀が進一に言った。郭の弟がにこにことうなずいていた。古賀が協力的と言ったのは、この弟のこともかもしれない。郭^{フオハンジャ}鴻鈞という名だった。

土間の片側にある鍋台^{ガクダイ}に、下男と覚しいのが、豆殻の燃料を運んでいた。夕食の仕度にかかるのだろう。進一たちは土間の左側の部屋に導かれた。

その夜はこの屯子に泊って、翌朝農民たちに集まって貰う予定だった。合作社^{ホウソクシヤ}のことを正式に農民に説明しようというのだ。

郭一家にはすでに古賀から話してあった。古賀の手で戸別調査も行われていた。翌朝、公的な組織にまで持って行くとういうのだ。

「朝、みんなに集まるようにと、今夜のうちに知らせておきましょう」

郭の弟が王の通訳でそう言った。